

稲葉一郎

中国の歴史思想

— 紀伝体考 —



創文社刊

(いなば・いちろう) 1936年、大阪市に生まれる。
 1961年、京都大学文学部史学科(東洋史専攻)卒業。
 同大学院文学研究科博士課程修了。立命館大学文学部
 助手、助教授、教授を経て、1980年より関西学院大
 学文学部教授、現在に至る。文学博士(京都大学)。
 [主要業績(論文)]「秦始皇の貨幣統一について」
 (『東洋史研究』37-1, 1978年),「桑弘羊政治経済論
 管窺」(『人文論究』30-3, 1980年),「秦始皇の巡符
 と刻石」(『書論』25, 1989年),『歴年図』と『通
 志』—『資治通鑑』の成立過程に関する一考察—
 (『史林』74-4, 1991年),「司馬光の政治思想—主と
 して改革派官僚期における—」(『アジアの文化と社
 会』法律文化社, 1995年)他。



中国学芸叢書

(7)

〔中国の歴史思想〕

一九九九年三月一〇日 第一刷印刷
 一九九九年三月一五日 第一刷発行

著 者 稲 葉 一 郎
 発 行 者 久 保 井 浩 俊
 発 行 所 株式会社 創 文 社

〒101-0031 東京都千代田区麴町二丁目六十七番
 TEL 03-3211-7101 FAX 03-3211-7102

ISBN4-423-19410-4
 Printed in Japan

精興社印刷
 鈴木製本所

目次

序言

第一章 歴史叙述の形成

一 歴史説話の揺籃

二 歴史叙述の淵源

1 歴史説話集の成立

2 年代記の形成

3 史官精神の発達

三 戦国諸子と歴史

1 孔子と歴史

2 墨子と歴史

3 孟子と歴史

4 『呂氏春秋』と歴史

三

七

六

六

六

三

六

四

四

四

五

五

第二章 司馬遷父子と『史記』

- 一 司馬談と司馬遷
- 二 司馬談の著述
- 三 司馬遷の著述
- 四 資料批判
- 五 『史記』の構成
- 六 応報思想
- 七 歴史認識
- 八 同時代批判
- 小 結

第三章 歴史叙述の発展

- 一 班固父子と『漢書』
- 二 荀悦と『前漢紀』
- 三 三史と史部

壹

貳

参

肆

伍

陸

柒

捌

玖

拾

十一

十二

十三

十四

十五

第四章 劉知幾と『史通』

一七

一 初唐の修史事業

一九

二 『史通』の成立

二〇七

三 史料批判

二二六

1 史料論

二二六

2 史料批判

二三三

四 歴史像の構成

二三二

五 歴史認識

二四三

六 歴史文體論

二五一

七 六家二體論——紀伝體と編年體と

二五七

1 六家

二五九

2 二體

二六六

小結

二七四

結 言

二七九

1 史館制度と史料編修のその後

二九〇

2 歴史叙述の倫理性と客観性

二九四

索引

あとがき

3	編年体史と地方志
4	中国の歴史叙述の今後

1	
20	

三〇五	
二九六	

中国の歴史思想——紀伝体考

序 言

中国はよく歴史の国であるといわれる。それはおそらく中国が世界の四大文明の一つ、黄河文明以来のいわゆる悠久の歴史を刻んできただけでなく、汗牛充棟もただならざる膨大な数量の歴史叙述（歴史書）を保有し、今日なお精力的に生産しつづけているからであらう。しかも特筆すべきはその歴史叙述の水準がきわめて高く、上古以来の多くのものが今日の歴史研究にも十分耐え、かつ利用しうるものであることである。

十七世紀の西欧の知識人たちが中国の文化に接してもっとも強い衝撃をうけたのはこの国の歴史叙述の水準の高さであった。たとえば高名な哲学者ライブニッツ（一六四六―一七一六）は、宣教師たちがもち帰った文物や彼らの報告を通して中国の文化に触れ、自然科学や技術ではむしろ西欧の優越性（¹）をみとめたが、歴史叙述に関してはその客観性とそれを保障する制度の完備していることに脱帽した。⁽¹⁾啓蒙哲学者で歴史家のヴォルテール（一六九四―一七七八）も『歴史哲学』のなかでこの国の年代記と日月食などの天体観測の正確さはすべての民族の及ばないものであるとして（²）いる。⁽²⁾こうした知識人たちの証言はこの国を「歴史の国」とする評価を定着させるのに貢献したといつてよい。

西ヨーロッパの知識人たちを驚かした歴史叙述の水準の高さは決して中国の偶然がもたらしたものの

ではない。かのヘロドトス（前四八四頃～前四二八頃）は東地中海沿岸諸国を旅行し資料を収集して『歴史』を著わし、トゥキュディデス（前四六〇頃～前四〇〇頃）もアッティカ・ペロポネソス半島を中心とするギリシア世界という限定された地域内ながら広範囲に資料を集めて『戦史』を著わしたが、その後、ヨーロッパではこのような卓れた歴史家が不断にかつ継続的に出現することはなかった。このことは特別の才能と好条件、そして彼らの異常な努力なくしては歴史叙述は困難であることを暗示しているように思われる。歴史叙述を困難にしている最大の原因は資料収集にあるといっても過言ではない。すぐれた歴史叙述をあらわすには何よりも広範で充実した資料が不可欠である。しかしながら個々の歴史家がどのように努力しようとも個々に集められる資料には限りがあり、資料漏れを避けることはできない。その上、それぞれの置かれた政治的・社会的・文化的環境の制約を受けて所期の目的を達成できなかったものも多い。とすれば豊富な資料に裏づけられた客観的な歴史叙述を書きつづけるためには何よりも制度面での保障が必要になる。むしろ資料を整備して歴史叙述を著わしやすい環境を整えることこそが歴史叙述の質を高め、その科学的水準を向上させる前提になる。西欧で古代ギリシア・ローマの卓れた歴史叙述の伝統が永続しなかったのに対し、中国で上のように高い水準の歴史叙述を継続的に生産し得たのはこの制度的保障の成果であるといつてさしつかえない。後文に見るように、早くから資料館のような特定の設備が存在したからこそ、歴史家は比較的整備された資料の利用によりその不備から免れただけでなく、資料採集に費やす時間を資料批判と歴史像の構成に向けることができたのである。

近代歴史学の成立条件が、大学や研究所のような、史料の整備をとまなう制度的保障の確立にあつたとするならば、中国歴代王朝の東観とうかんや著作局、史館、翰林院かんとんなどにおける史料の恒常的な整備と保存はそれに相当するものであるといえよう。これら資料館の存在が客観的で科学的な歴史学の発達に寄与したことは間違いない。唐代に水準の高い史学理論が出現するのはそのような条件整備の成果と見ることができる。

ところで中国の歴史叙述は、上のように積極的な評価を得る一方で、それとは対照的に極めて低い消極的評価が加えられているのも事実である。その最も極端なものはヘーゲル（二七七〇～一八三二）の講義録『歴史哲学講義』⁽⁴⁾に示されている中国の歴史叙述の意味づけや中国文化の歴史的位置づけであろう。ヘーゲルはそこで歴史叙述に関して「中国の学問そのものについていうと、歴史は明らかになつた事実のすべてを判断や理由づけなしにとりこ（む）」（第一篇、中国、二二四頁）といい、中国の歴史叙述の特性として無目的性と無意味さを指摘している。この点については、かつて川勝義雄が慨嘆し批判の一文を草したことはなお記憶に新しい。⁽⁵⁾この点の判定は本書のなかでおのずから明らかになるはずなので、後文にゆずることとし、後者、すなわち中国文化の位置づけについてみると「（自然のままで停滞しつづける）中国とインドはわたしたちの手で歴史の世界にくみこまれることによってはじめて歴史的存在となる」（第三篇、ベルシア、二八三頁）といい、発達をためて久しい停滞アジアの一国として歴史的に位置づける一方、ヴォルテールやラプラス（一七四九～一八二七）が称賛した中国の天文学的認識についても「中国の天文学も偉大だと長く思われてきましたが（中略）

それはむしろ学問の体をなしていない。(天文学的)記録といっても、とても知識といえるようなものではない(い)(第一篇、中国、二二六頁)とこきおろしている。中国文化も天体観測にもとづく中国の天文学的認識もまことに惨めな評価が下されているのである。

先のライブニッツやヴォルテールの認識とこのヘーゲルのそれとの間の、このような大きな落差はどのように理解すればよいのか。両者の置かれた時間的・地域的な環境の差異を指摘するだけでは十分な説明にならないであろう。むしろ当時のアジアに関する限られた情報源からこうした両極端の見解を生んだ西欧の文化的背景に関心が向けられよう。

今日の時点で学説史的に整理すれば、ヘーゲルの示した中国文化に対する評価ないし観点も決して特異なものだったのではなく、当時の西欧における中国文化に対するさまざまな理解の中の一つとして位置づけることができる。大航海時代をへて世界の実情が次第に明らかになるにつれ、西欧の知識人を悩ませたのは中国の歴史の古さであった。彼らの間では、『旧約聖書』を中心に構成された普遍史(Universal History)の始原よりも古く、ノアの大洪水よりもはるかに古い起源をもつ中国の歴史の存在をどう扱うかが重大な問題となり、あるものはこれを無視し、あるものは積極的に評価し、あるものはこれに消極的態度あるいは拒否反応を示した。⁽⁶⁾上に見たライブニッツは第二の立場であり、ヴォルテールは一面では積極的に評価しつつも第三の立場をとった。彼は著述『ルイ十四世の世紀』(一七五二)でルイ十四世の時代を世界史上の特筆すべき四つの盛世の中でも最高のものとし、中国文化に言及して、二千年前にすでに発達の最終段階を迎え、以後は停滞したと位置づけることによっ

てこの問題を処理したものである。しかしのちに著わした『歴史哲学』（一七六五）では逆に歴史叙述を中心として中国文化を見直すような見解を示している。ヘーゲルが継承したのはヴォルテールの前者の立場であり、そこから中国文化はエジプト文明と同様に古代文明なみに評価されることになったのである。

ヘーゲルは一方では清朝の乾隆帝時代における文化事業の精華たる『四庫全書』や当時の国史の編修にもたずさわった翰林院などに関する比較的正確な情報をもちながら（第一篇、中国、二二一・二頁）、それにもかかわらず上のような評価をするのはヘーゲル独特の観念論的歴史観に災いされたものと考えられる。世界史を神の摂理の計画の表現としてとらえる彼の観念論的歴史観に災いされたもの時代のランケ（一七九五～一八八六）でさえも「（ヘーゲルの）人類の歴史はあたかも一つの論理過程のように定立、反定立、媒介において肯定と否定とにおいて展開していくもの」であり、「理念のみが独立の生命をもち、全ての人間はこの理念によって充たされた影像もしくは図型にすぎない」と批判し、受容を拒否したほどである。彼は歴史を神意の証としながらも、特殊がその独立の生命を失い、前世のものが後世のものに完全に凌駕されるとするヘーゲルの主張にくみすることができなかったのである。⁽⁹⁾

十八世紀および十九世紀前半の知的水準をもとに構成された世界史像はその後の諸学の発達により次第に時代遅れのものとなったことは周知の通りである。今日ではヘーゲルを拒否した当のランケの世界史観、さらにはヘーゲルの観念論を揚棄したマルクス（一八一八～一八八三）の唯物史観も、そ

の後の実証的歴史研究の蓄積や文化人類学、民俗学、考古学、歴史地理学などの発達とその成果によって相対化され、すでに過去のものとなっている。⁽¹⁰⁾とすればヘーゲルの偏見に充ちた中国文化や中国の歴史叙述に関する認識をここで改めて俎上にのぼせ、事々しく論述する必要はないであろう。むしろ我々が真剣に検討すべきはもう一つの偏見、すなわち中国の歴史叙述に示されている倫理的な性格を見て、これを前近代的として低く評価する見解であろう。

『歴史主義の歴史理論』を著わし、マイネッケの『歴史主義の立場』や『ランケとブルクハルト』を翻訳した中山治一は西欧の史学思想に造詣の深い歴史学者だが、氏はその著『史学概論』のなかで中国の歴史叙述を取り上げ、ヨーロッパでは歴史学が科学性を獲得するために教会との熾烈な戦いを通して宗教性と倫理性を克服した事実を挙げ（前掲書第四章）、それとの対比においてこの国の歴史叙述に共通に示されている儒教に由来する倫理性に言及して前近代的・非科学的な側面のあることを指摘している。⁽¹¹⁾

一体、それぞれの文化圏における歴史叙述、歴史学の科学性をはかる基準は史料批判の在り方におかれている。収集された史料をどのように批判し吟味し、歴史像の構成に結びつけるか、収集史料の処理の仕方にそれぞれの歴史学の水準が示される。

ルネッサンス期のロレンツォ・ヴァラ（一四〇五～五七）の「コンスタンチヌス帝の寄進状」批判に端を発する教会文書の批判的研究は、十七・十八世紀にはマビヨン（一六三二～一七〇二）らによって方法論的にも整備・組織化され、聖書批判へと展開することになる。この聖書批判に反駁する目

的で書かれたのが司教ボシユエ（一六二七～一七〇四）の『世界史論』であり、『旧約聖書』を主要な資料として天地創造よりシャルルマーニュに至る歴史を神の摂理の展開過程として著わした。こうした非科学的な歴史に対する批判がベール（一六四七～一七〇六）『歴史批評辞典』やヴォルテール（『歴史哲学』）をはじめとする文献学者や歴史家たちによって展開される。その後の西欧の歴史研究では合理性を確保する前提として宗教性・倫理性を排除することを要求した。こうしたヨーロッパにおける歴史学の成立過程からして科学性を保障する上で宗教性や倫理性は排除すべきものとされたのである。⁽¹²⁾

教会文書・聖書批判を通して発達した文献批判の方法は十八世紀にはゲッティンゲン大学でガッテラー（一七二七～一七九九）らによって歴史学に応用され、歴史学における史料批判の方法として定着した。⁽¹³⁾ やがて史料批判はランケによって方法論として体系化されるが、この史料批判の方法論の確立がすなわち科学としての歴史学の成立でもある。⁽¹⁴⁾ そして歴史学、史料批判の確立は近代ヨーロッパの所産として位置づけられている。

これに対して中国では、上にも触れたように、前二世紀（漢代）以後、史料の吟味の水準はしだいに高められ、七・八世紀には、一定水準にまで達していた（後述）。このような史料の合理的科学的な処理の上に歴史叙述が著わされていたとすれば、その歴史叙述における倫理性はどのように評価すべきなのであろうか。この問題は、結論からいえば、それぞれの歴史的背景の相違と各文化圏の価値観の差異に帰着する、というべきであろう。西欧では、先に触れたような、教会との文化闘争の結果、

教会からの干渉を排除することにより合理性と科学性を獲得したという歴史があった。しかしながら中国では全く事情を異にし、教会の干渉と無縁であったことはいうまでもない。何らかの圧力が歴史叙述に加えられたとすれば、それは皇帝権力ないし為政者からのものであったろう。そして歴史叙述に加えられる圧力に対しては中国の歴史家たちは生命をかけてその客観性を守ろうとしたし、権力からの圧力に抗して事実を直書^{ちよくしよ}した歴史家は伝統的に人々の称賛を受けた(第一章二三を参照)。直書することによって権力者の悪業を後世に伝え、正義を記録し、そのことを通して勸戒を示すのが歴史家の使命でもあったからである。この直書こそが倫理規範の追求でもあった。だから倫理規範を追求しない歴史叙述は魂の抜けた歴史叙述と見なされた。しかしそうであるとするならば、客観性が倫理性の犠牲にされることはなかったのであろうか。中国の歴史叙述は倫理性と客観性・科学性をどのように両立させたのであろうか。また歴史叙述が倫理性と分かちがたく結びつくことになったのにはどのような由来があるのであろうか、そして歴史叙述と倫理性の結合にどのような意義があるのか。この倫理性の由来と意義の解明は、中国の歴史叙述の特質の解明にも関わる問題として本書でも追究されねばならない重要な課題である。

ではその特質を解明すべき中国の歴史叙述とはそもそもどのような歴史叙述なのであろうか。一般に中国の歴史叙述といえば、人々が直ちに思い起こすのはいわゆる紀伝体史であろう。『史記』をはじめとして『漢書』『三国志』以下、最後の王朝史『清史稿』にいたるまで、正統的な歴史叙述はこの形式によって書かれてきた。この中国固有の、そして特異な歴史叙述の形式はそもそも中国の歴史